



かわしま

mail:y3kawash@edu.city.yokohama.jp

http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawashima/

学校だより 9月号
平成 22 年 8 月 27 日
横浜市立川島小学校
校長 小池 慎一
TEL 3 7 1 - 0 7 5 7
FAX 3 8 1 - 7 2 4 8

夢をつれて帰ってきたはやぶさ

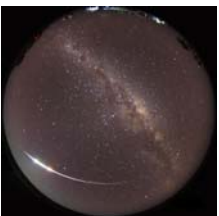
がっこうちょう こいけ しんいち
学校長 小池 慎一

「今から約 50 億年くらい前、星が爆発したときに宇宙の中にまき散らされた塵が集まって、太陽ができ地球ができ、そこからやがて人類が生まれた。だから 私たちの体は宇宙の星のかけらでできている。人類というのは星の子どもたちなんだよ。」とは、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊さんのお話です。

その 50 億年くらい前の塵がどのようなものだったのかを知るために、日本の小惑星探査機「はやぶさ」を載せたロケットが、小惑星「イトカワ」に向けて 2003 年 5 月に鹿児島県内之浦から打ち上げられました。地球や月のように、塵が集まってから一度熔けて固まった星ではなく、小さいために一度も熔けたことのない小惑星には太陽系ができたころの痕跡が残っているはずだということです。



「はやぶさ」は、それから 2 年半後の 2005 年 11 月、地球からおおよそ 3 億 km 離れた小惑星「イトカワ」に到着し、写真撮影などの観測と表面の砂を採取して地球に持ち帰ることになっていました。しかし、順調に地球に戻れたわけではありませんでした。「イトカワ」に近づくまでの間にも、そして着地する際にも、またその後も、エンジンや制御装置や様々な部分が故障してしまったそうです。でも日本の技術者たちは、こうした複雑でやっかいな、想定外の問題を一つひとつ解決し、7 年間 60 億 km にわたる宇宙の旅から、今年 6 月 13 日に無事地球に帰還させました。



最先端技術「イオンエンジン」の開発者である國中均さんが「やっぱり努力でしょうね。努力です。とても『おもしろかった』ので、みんな一生懸命努力したんです。」と話されています。

こんな話に感動して、その「はやぶさ」の帰還したカプセルと「はやぶさ」の実物大の模型の展示を見てきました。帰還カプセルの「前面耐熱シールド」は、出発前の写真と比べると、真っ黒に煤けていて、地球の大気圏突入の時の熱のすごさが分かります。普段は存在をあまり意識しない空気の力を感じました。このカプセルの中には、小さな砂粒が入っていることが確認されているそうですが、それが「イトカワ」の砂粒かどうかはまだ分からないそうです。

長辺でもわずか 540 m ほどの岩の塊のような小さな天体に行って、たくさんのデータをただけでなく、多くの困難に遭遇しても負けることなく、地球まで間違いなく戻って来られる、そんなことができるということが、素晴らしいことだと思えます。例えば、カプセルの中に「イトカワ」の砂が入っていなかったとしても、一生懸命努力すれば、必ず成し遂げられるという、そんな夢を持ち帰ってきたことが、とてもステキなことだと思えました。